

「ヤクザマネー、社会を蝕む闇の資金」の取材を通じて



NHK報道局社会部

記者 板倉 弘政

『全国センターだより』55号

名前が登場する人物だった。

私たちがかつて取材した暴力団関係者や「共生者」たち。今、ようやく取締りの網がかけられ、事件化されてきているわけだが、「ヤクザマネー」で取材した三年近く前から、株式市場や不動産市場で暗躍が続いている。

私たちが、NHKスペシャル「ヤクザマネー」を取材、制作したのは、時代とともに姿を変える暴力団の

「今」、とりわけ「シノギ」と呼ばれる暴力団の資金獲得活動の最新現場を記録しようという思いからだつた。

もう一つは、東証二部上場の持

株会社の会長が、自分が大株主だつた会社と実体のないコンサルタント

契約を結んで一七億円余りを流出さ

せたとして特別背任の疑いで去年十

月に逮捕された事件。

さらに、東証二部上場の神奈川県

の精密機器メーカーの経営に関わつ

ていた東京のゴルフ場経営会社の代

表らが、増資などの情報が公表され

る前に、このメーカーの株をインサ

イダー取り引きしたとして、今年二

月、金融商品取引法違反の疑いで逮

捕された。

彼らは、株式市場で暴力団ら反社

警察能との接触は厳禁、場合によつては、破門、絶縁にまでする組もある。我々、警察の側も、暴力団に人脈を

私たちが最新の暴力団の資金源に迫ろうと長期取材を行つたのは、三年近く前のこと。その取材結果は、二〇〇七年十一月十一日にNHKスペシャル「ヤクザマネー、社会を蝕む闇の資金」として放送したが、その当時、私たちが取材した暴力団関係者や、「共生者」と呼ばれ、暴力団の資金獲得に協力する金融ブローカーたちが、今、続々と逮捕されている。

去年から今年にかけて、私の携帯電話に取材先の暴力団関係者からかかってくる電話は、このようなものが多くなつてゐる。

私たちが最新の暴力団の資金源に迫ろうと長期取材を行つたのは、三年近く前のこと。その取材結果は、二〇〇七年十一月十一日にNHKスペシャル「ヤクザマネー、社会を蝕む闇の資金」として放送したが、その当時、私たちが取材した暴力団関係者や、「共生者」と呼ばれ、暴

力団の資金獲得に協力する金融ブローカーの〇〇さんが逮捕されたぞ！」
「金融ブローカーの〇〇さんが捕まつた！」

いくつかの事例を紹介しようと思

う。

一つは、ジャスダックに上場していたシステム開発会社が、民事再生法の適用を申請する直前に、数千万円の資産を酒販売会社に優先的に譲渡し、ほかの債権者に損害を与えた

として、今年二月に摘発された事件。もう一つは、東証二部上場の持株会社の会長が、自分が大株主だつた会社と実体のないコンサルタント契約を結んで一七億円余りを流出させたとして特別背任の疑いで去年十一月に逮捕された事件。

そして、東証二部上場の神奈川県システム開発会社の社長や、酒販売会社元会長の元暴力団幹部、金融ブローカーらが民事再生法違反の疑いで逮捕された。この事件は、さらに

表らが、増資などの情報が公表され手に動かなくなつてきた。もちろん、アンダーラウンドでは動いているのだが、何せ尻尾が掴めない。

情報を取りろうにも、暴力団側は、警察との接觸は厳禁、場合によつてマーケット、私たちも三年前に取材

金融ブローカーや元暴力団幹部は、捜査当局が「共生者」の代表格とし

てマークし、私たちも三年前に取材

持った刑事が減つてきているし、若い刑事は、そもそも暴力団事務所に行くことを嫌がる始末だ。だから、『取調室で協力者を作れ』というのが、今の合言葉になつていてる。

逮捕した後、取調室でじっくり話ををしていつて協力者を作るしかない時代になつてきているのだが、山口組の最高幹部の一人は、一度でも逮捕された者は、警察の協力者になつている疑いが捨て切れないから、前科前歴のある若い衆は自分のボディーガードには使わないという情報が伝わつてきてる。昔のように馴染みの捜査員に頼まれば引き下がつてくれるという話し合いのできる関係ではなくなりつつあり、地下に潜り始めている。

その一方で、経済活動では、ヤクザという看板を巧みに隠しながら、我々、一般社会に密かに浸透している。このようなマフィア化が進んでいる暴力団と、いかに戦っていくか。警察は真剣に考えなければならない時代に入っている」

NHKでは、私たちが放送したNHKスペシャル「ヤクザマネー」の以前から、その時代、時代においての暴力団の姿を記録し続けている。山口組の田岡一雄・三代目組長の

後を継いだ、竹中正久・四代目組長の襲名まもない昭和五九年八月二七日には、NHK特集「山口組」知られざる組織の内幕」が放送されている。この番組は、竹中組長の襲名に反発して離脱した一和会との間で繰り広げられた抗争事件「山一抗争」の真っ只中に放送されたものだた。竹中組長みずからがインタビューに応じたほか、当時の山口組の最高幹部の面々、対する一和会の最高幹部たちが次々にインタビューを受けている。翌昭和六十年一月二六日、竹中組長は、一和会系の暴力団員らに銃撃されて非業の死を遂げるが、この時の番組映像は、今となつては貴重な記録となつていてる。

平成九年四月六日には、NHKスペシャル「闇の暴力・企業舎弟」という番組が放送されている。渡辺芳則・五代目組長の時代、暴力団の素顔を隠して経済活動を行うことで社会問題となつた「企業舎弟」に焦点を当てた番組だつた。一人の「企業舎弟」に密着取材を行つて、バブル崩壊後でも不良債権の処理で暗躍する暴力団の経済活動が描かれていた。

このように、NHKでは、暴力団の姿を記録してきているだけに、みると、実は、この古いタイプの暴力

なつてきている……』という警察幹部の話を受けて、「じゃあ、暴力団の今姿、最新の資金源の一端を取材して明らかにしてみましよう」と言つたわけだつた。ある意味、番組を通じて暴力団を克明に記録すること、暴力団の活動を可視化させることこそが、報道の立場からの暴力団対策だと思ったからだつた。しかし、まさかその後、一年近くの時間を暴力団の資金源の取材に費やすことにならうとは思いもしなかつた。

NHKスペシャル「ヤクザマネー」の冒頭では、繁華街を歩く一人の暴力団幹部の話から始まる。この暴力団幹部は、私が暴力団の取材を始めたうえで、暴力団の思考回路、行動原理を聞くために接触した人物だつた。「仁義」「任侠」という言葉が似合う古いタイプの暴力団で、「親睦会の会費」と称して飲食店やホスト、スカウトから力ネを集めることや、「切り取り」と呼ぶ債権回収を「シノギ」にしていた。いわゆる伝統的な資金獲得活動であり、私たちが明らかにしようとした取材を始めた最新の「シノギ」ではなかつた。

ところが、ある時、「株をやつてみる暴力団がいないか」と聞いてみると、実は、この古いタイプの暴力団も、株取引をやつたことがあるというのだ。兄貴分の暴力団から「この株が上がるそうだから一口乗つてみろ」と言われたのがきっかけで、始めたようになつたという。株好きの社長からの情報が元になつた儲け話で、実際に一回の株取引で数千万円の利益を得たと話した。

株取引というと、一部のアッパークラスの暴力団だけがやつていいものかと思ったら、実はそうではなく、中堅クラスの組員、末端組員にまで広がつてゐる現実が見えてきた取材だつた。

私たちが最新の資金源の現場として、最も衝撃を受けたのが、暴力団のデイーリングルームだつた。取材時間はわずか三時間という制約の中で取材、撮影したわけだが、あの時にした衝撃は今でも頭から離れない。

当初、私たちは、「経済に強い暴力団」という触れ込みで、国内有数の広域暴力団の幹部を紹介された。しかし、ヤミ金融や地上げ、賭博といった一般的な「シノギ」については口にするものの、株取引や不動産ファンドといった最新の「シノギ」についてはなかなか語ろうとはしなかつた。「人の懐、財布の中をのぞ

金の田子方子の

くようなものだ」と言うばかりだったが、粘り強く取材交渉をした結果、暴力団幹部は以下のように口を開いた。

「コックピットの撮影は構わない。事務所の一室に、パソコンのディスプレイを並べて、株取引をやつている。ディスプレイをコの字型に配置していく、まるで飛行機のコックピットのようだから、そう呼んでいる」

暴力団幹部の話によると、自分の組の力ネ、投資好きの一般投資家の力ネを集めた投資ファンドを組成している。集まつた力ネを、鉱山の開発などに投資して運用するが、その運用益は年に一回とか半期とかでしか出ないので、日々の儲けがない。つまり日銭が稼げない。そこで、ファンドの力ネの一部を、大規模なディトレードに回して、日々の株取引で儲けを出しているというのだ。

そして、衝撃的なシーン、暴力団の「秘密のディーリングルーム」の撮影へと至った。案内されたのは、二〇階建てのマンションだった。それほど新しいものでも、高級感が漂うものでもなかつたのが意外だった。エレベーターに乗つて、そのまま最上階まで上がつた。廊下の突き当たりの一番奥の部屋が目指す場所だつ

た。しかも驚いたことに、隣の部屋には一般の住民が暮らしていた。

玄関ドアを開けて中に入ると、部屋はマンションの外観とはうつてかわつて白と黒のモノトーンで統一さ

れていた。壁と床は輝くような白。ソファや家具類は重々しい黒。イタリアの高級家具メーカーの特注品だ

という。そんな部屋を抜けて最も奥まつた部屋へ向かつた。そして暴力団幹部が、そつと観音開きの扉を開けた。

「秘密の『ディーリングルーム』。ずらりと並んだ、一二台のディスプレイ。広さ六畳ほどしかない。パソコン、ディスプレイ、そしてLANケーブルや電源ケーブルといった配線の類がむき出しになつて床の上を這つてしまつた。ディーリングに必要なものしかない無機質な空間。インターネットによる株取引が行われている現場、まさにコックピットだった。暴力団の新たな資金獲得の現場、「ヤクザマネー」を膨張させている現場が、そこにあつた。

さらに驚いたのは、コックピットに座つていた人物の姿だつた。濃いカーキ色のタンクトップを着た男。腕をむき出しにして、色落ち加工が施されたジーンズをはき、しかも裸

足という、何ともラフなスタイル。

およそ暴力団の事務所には不釣合いな格好の男が、そこにいた。長時間座つても腰が痛くならないよう、ゆつたり目の黒革のイスに、足

を組んで悠然と座つていた。

タンクトップの男は、以前、コンピューター関係の会社に勤め、インターネット取引のシステムをつくる仕事をしていた。と同時に、ディトレーダーとして、月に一〇〇～一五〇の利益を出していたという。その技術と知識に目をつけた暴力団幹部の男が、「自分の力ネも運用しないか」とスカウトして、高額な報酬で雇う

ようになつたのだ。

ディーリングルームで行われているのは、値動きの激しい銘柄を見つけ出し、その日に買って、その日に売るディトレード。株価の変動が激しいベンチャー株をターゲットに、一度に大きな資金を突つ込み、大量

の株取引をするため、わずかな値動きでも、利益は大きいといふ。そして、確実に儲ける仕組みとして、暴力団を紛れ込ませて利益を分け合つていた。

元証券マンは、「ヤクザマネー」について、こう言つていた。

「いわゆるお金に色はないわけですが、投資家さん的一部であると思つて、投資家との情報網があるという。企業の新規事業の発表のタイミングや企業の合併、買収の動きといった、

暴力団が資金を出し、運用はプロのトレーダーに任せる。派遣や請負を活用するオモテ経済と同じように、ウラ経済でも、「シノギ」のアウトソーシングが行われていた。

この時の取材を終えて、私たちは暴力団の資金獲得に協力する一般人、「共生者」の存在を強く意識して取材に当たることになった。暴力団そのものには、金融の知識があるわけではなく、「ヤクザマネー」を膨張させているのは、実は、金融知識を豊富に持つたプロとしての「共生者」の力が大きいのではないかと思つたからだ。

私たちが取材した「共生者」は、元証券マン、元公認会計士、そして元銀行員など。番組で紹介した元証券マンは、海外に設立した投資ファンドを運営し、多くの投資家の中に暴力団を紛れ込ませて利益を分け合つていた。

元証券マンは、「ヤクザマネー」について、こう言つていた。

いる中で紛れ込んでしまうのは、仕方がないのかなと思います。市場全てから見たら、必要悪ですかね。まあ潤滑油みたいなもので、これが全てなくなつたら、市場は大変なことになると 思います」

また、同じように取材した元公認会計士は、暴力団が作ったペーパーカンパニーを業績の上がつている企業に見せかける手伝いを行い、そこに元銀行員の協力で、銀行から多額の融資をつけさせていた。半年ほどは融資の返済も行うものの、最終的には融資を受けた企業を閉鎖、飛ばしてしまつて手仕舞いするという手口だった。

元証券マン、元公認会計士、元銀行員。そして「ディーリングルームにいたタンクトップの男。いずれも、暴力団を「ビジネスパートナー」と言い切り、お互いに利益を得る関係、ワイン・ワインの関係だと言つていた。そして、その良好な関係はいつまでも続くものだと信じて疑わない様子だった。中には、暴力団との関係がこじれて身体的にも危害を加えられるケースもあることをどう思うかと質問すると、「それは、ビジネスをうまく導けなかつたわけで、その者のスキル、ノウハウが足りなかつ

たからであつて、自分は絶対に失敗しない」と他人事のようにしか受け止めていなかつた。

私は彼ら「共生者」の言葉の一つに危うさを感じざるを得なかつた。確かに、資金力のある暴力団は、ビジネスパートナーとしては魅力だとは思うし、人に恐れられる暴力団と対等の関係でビジネスをするという変な優越感を感じることもあるだろう。しかし、暴力団は絶対に負けを許さない人種だと言つてもいい。何が何でも損をしないように資金の回収、追い込みに力を注ぐし、そのためには手段を選ばないところがあるということを忘れてはならないと思う。

そして、私たちの取材でも、こうした暴力団の恐ろしさと、「共生者」の危うさを目の当たりにするこになつた。

登場人物は、ベンチャー企業への投資や融資を行つていた暴力団と、三〇代のＩＴ企業の経営者だ。

暴力団は、新興市場への上場を目指すベンチャー企業にカネを出し、

代わりに株を取る。そして上場を果たした段階で、その株の価値が上がりで売り払つて利益を確定させるのである。いわゆるＩＰＯ（株

式上場）狙いの投資ビジネスで、完全に合法的なものだつた。ベンチャー企業はカネを受け取る代わりに、会社の命とも言える株を渡す。冷静に考えれば、会社そのものを握られてしまうようと思うのだが、新しい会社でまだまだ実績のないベンチャー企業にとつては、銀行からの融資はなかなか下りず、暴力団の元には、数多くの依頼が舞い込んでいた。暴力団は、ベンチャー企業が上場を目指すために必要なカネを出しているわけである。ある意味、人助けでもあると言つた。

では、なぜベンチャー企業は「ヤクザマネー」に頼るのか。私たちが取材したＩＴ企業の経営者は、設立当時、事業拡大のための資金を必要として、銀行を回つて会社の将来性を訴えたという。しかし、自分たちが持つ最先端の技術をいくら説明しても取り合つてもらえず、そんな中、経営者仲間から紹介されたのが投資ビジネスをする暴力団だつたということだつた。

ＩＴ企業の経営者は、こう言う。「銀行に限らず、ベンチャーキャピタル、ノンバンクなどありますが、非常に審査も厳しきつたり、時間もかかるつたりするわけです。半年くら

いかかってしまうこともあります。それなると、もうせつかくの商機が終わつてしまふわけですよ。方法論がどうよりかは、やはり運転資金がほしいといったところが先に立ちますので、お願ひするほかないわけです。反社会的なものと手を結ぶというけれども、事業がうまく行けば、返済もできるわけですし、返してしまえば関係はなくなるので。一時的に必要な時に、必要な手段を取つたといふふうに考えるしかないと 思います」

暴力団とＩＴ企業の経営者の関係。表向きは投資ビジネスの関係であるものの、暴力団側は、確実に利益を引き出すため、ある書類を経営者から取つていた。

名前と実印だけが押された白紙の委任状。自分たちの意に背いた場合、これがあれば会社の資産や売上金を強制的に取り上げることができるという。しかも、白紙の委任状を作る際のシチュエーションが恐ろしい。まさに投資や融資のためのカネを渡す際に、その場で実印を要求して白紙の委任状を作り上げるのだという。目の前にカネを用意しての白紙委任状の要求。「ヤクザマネー」の力が、すべての無理難題を押し通し、上場

を目指すベンチャーポーは無残にも消し飛んでしまう。いや、消し飛ぶのではなく、ベンチャーポー自身が、自らの利益のために売り渡しているのかもしれない。

暴力団、そして「共生者」の取材を通じて感じた怖さ。それは、私も取材で感じたことだが、今の暴力団、特に経済活動を得意とする暴力団は、スケートをきちんと着こなし、ネクタイも緩みなく、ある意味、紳士然とした人が増えていることだ。仁侠映画などで出てくるようなヤクザ像というのが、オモテに見えてこない人が多く、これが何となく普通に付き合ってしまう怖さではないかと思う。

さらに、暴力団の代わりに「共生者」が現れてくると、「共生者」は元々は私たちと同じ一般人であるために、益々、暴力団の姿が見えにくくなってしまう怖さがある。

そして、一度、関係が始まつてしまふと、ビジネスという名の関係では、資金力があり、現金でやりとりする傾向が強い性質上、ある意味、「いいパートナー」と映り、より関係が深まっていくスパイラルが待っている。そして、このいい関係がずっと続していくのではないかと信じたくなる。しかし、必ずしもいつも

まくいくわけではなく、その時のリスクを考えると、絶対に「いいパートナー」とは言えないのではないかということを強く言つておきたい。最後に、暴力団対策を進めるために、何が必要なのか、何に意識しなければならないのかについて記しておきたい。

私は、報道の立場から、やはり暴力団の姿を、その時代、その時代に沿つて記録し続けていくことが大事だと思つてはいる。もちろん暴力団取材は大変手間がかかり、尚且つ危険性もあるという意味では、そう頻繁にはできないものだが、それでも、一旦やめてしまうと、それこそ全く姿が見えなくなってしまう。実際の姿を視聴者に見てもらうことで、暴力団対策の重要性を喚起できればと思つてはいる。

こうした資料は、更新していくことは、暴力団との戦いの最前線にいる警察も同じだと思う。警察は事件を解決することが第一なのは当然のこととして、事件にはならずとも、暴力団の情報を蓄積していくことが大事だと思う。かつて警察は、全国最大の暴力団、山口組の組織構造や「シノギ」の種類、収益額を分析した資料を作成していた。

それは、「広域暴力団山口組壊滅史」という警察の内部資料で、昭和四三年六月三十日に兵庫県警察本部が作成したものだ。ページ数は、五六九ページにものぼる。その序には「犯罪社会学上の研究課題の一つでもある山口組の実態を明らかにするとともに、今後の捜査ならびに暴力団犯罪取締り対策に役立てるため後世に残す」とされている。この中で、初代組長から三代目組長に至るまでの山口組の勢力拡大の動きを記しているが、特筆すべきは、山口組の「シノギ」を事細かく分析していることだ。港湾荷役、建設・土建、芸能・興行などなど。年間の収益規模まで記されている。

こうした資料は、更新していくことは、暴力団には必ず暴力装置があるということも忘れてはならない。私たちがNHKスペシャル「ヤクザマネー」の取材をしていた時、実は、その裏で暴力団の凶悪事件が相次いでいたのだ。長崎市の市長が暴力団に射殺された事件、愛知県長久手町で元暴力団員が拳銃を持つて立てこもり、警察官が撃たれて死亡した事件、東京・町田市でも暴力団員の立てこもり事件があった。「ヤクザマネー」の取材では、経済ヤクザの取材をしていたので、こうした凶悪性の臭いは全くなく、むしろビジネスマンのような印象を持つていたわけだが、その一方、同じ暴力団という存在が凶悪事件を相次いで起こしていたという事実。あの時、背筋が寒くなつたことを、これからも絶対に忘れてはならないと思う。